



研究エッセイ

ESSAY

鬼神の面

廣田 律子 (神奈川大学大学院歴史民俗資料科学研究科・教授)



鬼来迎の鬼婆

千葉県の子供の鬼来迎では鬼婆が今年生まれたばかりの赤ちゃんを抱き上げ泣かそうとする。しかしどの子も一向に泣こうとしない。大きく目を見開き眉間にぐっとしわをよせ、太い火炎の眉毛をたて、鼻を膨らませ、口には牙をむくそんな鬼面は、今の子供にとってはもはや別に恐ろしい顔ではなくなったようである。

中国の鬼神面上に表現されているのは威嚇の表情、憤怒の表情である。鬼神の面は悪霊を降伏させる神格を持ち、角を生やし、目を怒らせ、口に牙を生やす、いわゆる日本の鬼に共通する形状を有する面である。

何に対して威嚇を試みる必要があるのか？威嚇する対象はこちらに種々な不幸をもたらす存在である。不幸とは疫病の流行、作物の不作、子が授からない、短命であること等である。種々な不幸の原因は、不幸をもたらす存在にあるとされ、その存在は人格をもつが、姿をなかなか現さないのである。例えば疫病の原因を、存在がはっきりと確認できるウィルスにあると考えるのではなく、存在を確かめられない疫神の仕業と考えるのである。

不幸をもたらす存在への対応とはといえば、平和的な対応と攻撃的な対応がある。平和的とは、供物を捧げ芸能を奉納し祭りをしてよい気持ちにさせて、すみやかに村を過ぎ越して行って貰おうとするやり方である。一方の攻撃的対応とは、法具を用い、被い清めの戦闘的な所作によって、村から早々に追い出してしまうというものである。

いずれにしろ一つ対応をあやまれば、病気が流行し、家畜が増えず、子授かりもままならず長寿を全うできなくなってしまう。不幸をもたらす存在を撃退する為には

人間だけの力ではとても対応できない。つまり強い助っ人が期待される。不幸をもたらす存在から人々を守ってくれる存在として一番身近に感じられている神々が、中国の旧正月の祭りに仮面をつけて登場する神々である。その神々の代表が鬼神である。

鬼神の面を着けて現実に登場させ、鬼神が実際に目に見えない邪悪なものと戦ってその場が平安にされたことを確認しなくては納得できないのである。見えない不幸をおよぼそうとするものを恐れるゆえに不幸のもとを断つために鬼神を味方につけ、その強いパワーで相手をやっつけてしまい幸福を得ようとする。強いパワーをもつ鬼神は味方につければ頼もしいものの、祀り方を間違えると手に負えない存在ともなりかねない厄介な存在である。それゆえ時を定め、祭りの場を整え待ち受けるのである。恐ろしい風貌をした鬼神が村の家々を訪れ、災いを為すものを逐い被ってくれると考えられているが、この鬼神は元来祖先を表現したものと推測する。



貴州省道真県 三王

周代の礼制を記した『周礼』方相氏の条に、「方相氏は熊皮をかぶり、黄金の四目あり、玄衣と朱裳もて戈を執り、盾を揚げ、百隷を帥いて時に讎し、以て室をもとめ疫を殴(お)う」とあり、古代の宮廷で仮面仮装をした方相氏によって、辟邪逐疫を行う讎の祭りが行われていたことがわかる。方相氏の風貌は本来、鬼の風貌と無関係ではなく、方相氏の俗称でもあった魁頭とは醜悪で大きな鬼頭を意味した。鬼頭は祖先を模した仮面を被った人を意味し、大きく、醜い形態をした仮面は、中国の鬼神の表現としての典型表現である。

方相氏もこのような特徴をそなえた形像をとり、邪をなすものを逐祓う存在なのであった。後に方相氏は、時を経て民間に入り、地方色豊かな種々な仮面神に交代をしたが、邪を祓う性格は受け継がれてきたといえる。



貴州省徳江県 開山

現在中国の追儺の祭りに上演される仮面芸能、通称儺戯(ヌオシ)に使用されている面に表現されているのは、辟邪慶進を行う神々である。その外見的特徴や役柄に見られる性格から分類してみると、老体の面、滑稽の面、雷神の面、武将の面、判官の面、鬼神の面、動物の面、婦人の面に大別できる。仮面の祭

りが民間に広まり、民族間の交流が進み、地方色豊かな、民族的特徴をそなえた様々な仮面神が生まれ出されてきたのである。

現在伝承されている面で、鬼神面として分類したが、明らかに恐ろしい風貌つまり日本の鬼に共通する顔立ちの神々がいる。大きく見開き眼球が飛び出した目、火炎の眉、大きな鼻、赤い口に二本あるいは四本の牙、額には縦目、頭に角、耳は大きく立つといった恐ろしい風貌の神々は、「開山」「大鬼」「三王」等と称され江南の各地に伝承されている。例えば開山はその名の通り山を切り開くとされ、とりものとして斧を持っている。開山は江南の中国に広く見られ、祭りの最初に登場してその場を清める役を担っている。動きも斧を振り回し、足を踏みならし激しく回転したりする。

鬼神面のもつ威嚇の表現とはやはり眼に現される。目をかっと見開き、不幸の元凶の正体を暴こうとする表現である。呪力をもった呪眼であるが、呪眼とは凡人の目には捉えられないものを見抜く力を持った眼といえる。不幸を為すものの正体が何か分かってしまえば、相手に勝ったも同然である。正体が分からないと対応のしようがないからである。正体を突き止める能力を持つ眼が呪眼である。もう一方で忌々しい邪悪な視線つまり邪視に対抗する能力を持つ眼ともいえる。視線をパチパチ交わす戦いに眼で勝たなければならないのである。

この呪眼を表現するのに中国の鬼神の面では大きな目

の黒目を残し、白目や眼の下あるいは鼻の際を彫り抜く方法がとられる。さらにこの黒目や目全体をぐっととび出させる形状が取られる。被り手の視野を顧みることなく、呪眼の表現に固執しているのである。



江西省万載県 鬼

目はとび出すことだけでなく数を多くしてもその眼力が現されることになる。目が二列に四個あったり、第三の目として額に縦目があったり、顔が頭の左右にも付いていて目が合計六個になる場合もある。呪眼を表現したと考えられ、邪悪なるものがどこにひそんで

いても、よく見通すことができる呪力を備えている表現である。邪をなすまなざし、それを防ぐまなざし、この相反するまなざしの存在と、そうしたまなざしを放つ呪力をもつ眼に対する信仰が基礎にあるからこそ、このような仮面の表現がなされているといえるのではないだろうか。

実はこの呪眼は能力の優れた宗教職能者、いわゆる巫は具えていたと思われる。かつて病人の病気の原因を巫に判断してもらうということが行われたが、恨みを抱いている死者が病人を苦しめているのだと不幸の原因を見抜いたりする記事が歴史書にも見られる。古くは『史記』武安侯伝、『漢書』灌夫伝に視鬼の語が見える。この視鬼者は、病の原因を判断するために、普通の人には見えない怨霊などの正体を明らかにする。こうした能力を持つ者は、いわゆる巫を生業としていたといえる。邪眼をもつ巫は浄眼、視鬼、見鬼等と呼ばれていた。

こうした特殊な能力を有さない場合、仮面を被って呪眼を手に入れる必要があったのではないかと想像できる。このような呪眼を持つことは、いわゆる有能な宗教者である事の条件ともなるわけだが、こうした能力を持たない人間がこの呪眼を獲得するためには、ある種の法具が必要となる。つまり仮面と言う法具を被ることで、宗教者としての能力を象徴する、眼の呪力を得ることになるわけである。呪眼を得るがために、仮面が着けられると言ってもよいのではないだろうか。仮面とは人間に特殊な能力を与える道具でもある。この辺に変身することの根本的な意味の一つがあると考えられる。